

博多137

博多遺跡群第183次調査報告

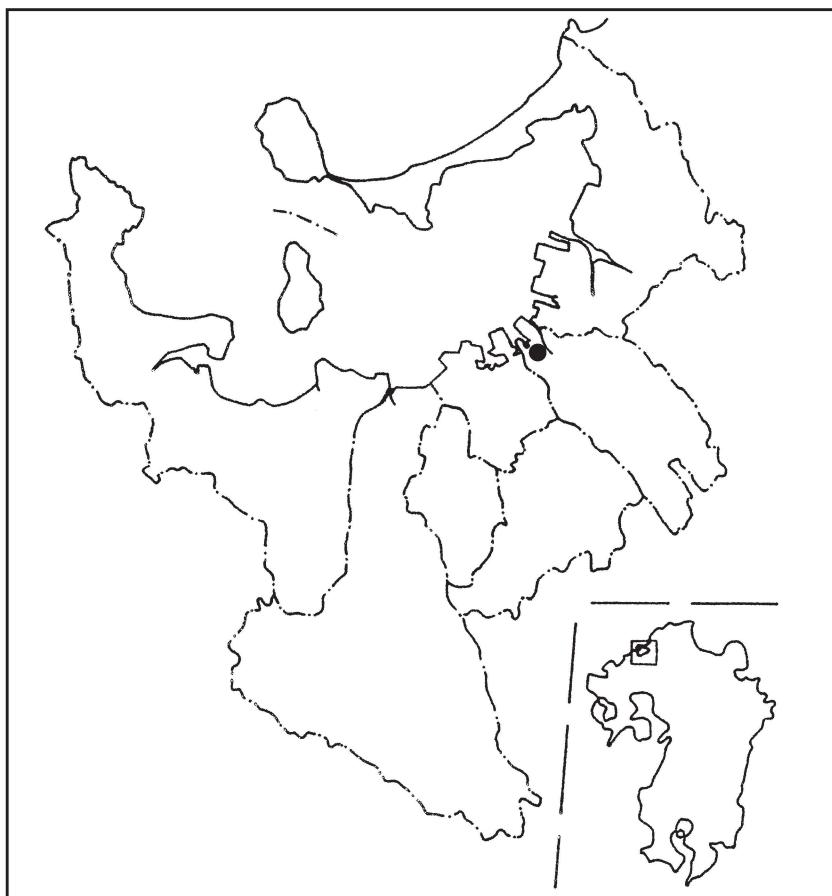
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1088集

二〇一〇

福岡市教育委員会

# 博多137

博多遺跡群第183次調査報告



遺跡番号 HKT-183  
調査番号 0815

2010

福岡市教育委員会

## 序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古の昔から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財を残してきました。中でも大博通りを中心にビル群が建ち並ぶ一帯は、博多遺跡群と呼ばれ、市内有数の遺跡の一つに数えられ、調査を開始して30年、回数も200回近くに及ぼうとしています。

本書は第183次調査の成果を収めるものです。調査対象地となった東長寺境内は、民間開発に伴う発掘調査が開始された記念すべき場所です。付近は「宋人百堂」と呼ばれ、はるばる海を越え商いに訪れた中国の人々が集まり住むとともに、心のよりどころとして墓堂を営んでいた場所とされています。その様子をイメージさせる多数の輸入陶磁器、それらに記された墨書、中国系の瓦が大量に出土しています。それに加え、祭祀・信仰に関わる遺物が含まれ、当時の人々の内面に迫る資料も確認されており、貴重な成果が得られています。

今回も含め3度にわたり発掘調査にご協力をいただいた宗教法人東長寺関係各位に、感謝の意を表するとともに、本書を通じて調査成果がより多くの方々に共有され、活用されることを願ってやみません。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

## 例　言

1. 本書は五重塔建設に伴い、福岡市博多区御供所町2-4 東長寺境内において実施した博多遺跡群第183次調査の報告である。
2. 検出遺構は右の略号を付した。 S X 杭列
3. 本書で用いる方位は磁北であり、真北から $6^{\circ} 21'$ 西偏する。
4. 本書使用の図面の作成は池崎譲二・木下博文が行った。
5. 遺構・遺物の写真撮影は池崎・木下が行った。
6. 遺物の実測、採拓、製図は木下が行った。
7. 本文・挿図・図版・表における遺物番号は通し番号とし、それぞれ対応する。
8. 輸入陶磁器の分類は太宰府分類（太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』2000年）によった。
9. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
10. 本書の執筆・編集は木下が行った。

調査番号 0815	遺跡略号 HKT-183	分布地図番号 49 天神 0121
所在地 博多区御供所町2-4	事前審査番号 19-2-776	
開発面積 8783.7m <sup>2</sup>	調査対象面積 168m <sup>2</sup>	調査面積 153.4m <sup>2</sup>
調査期間 2008. 6. 9 ~ 6. 23		

## 本文目次

第1章 はじめに .....	1
1 調査に至る経緯	
2 調査体制	
第2章 遺跡の位置と環境 .....	1
第3章 調査の記録 .....	3
第4章 まとめ .....	14

## 挿図目次

図1 遺跡の位置 (S = 1/25000) .....	2
図2 調査地点の位置 (S = 1/8000) .....	2
図3 調査の位置 (S = 1/1000) .....	4
図4 調査区平面図 (S = 1/100) .....	4
図5 調査区北壁・東壁土層断面図 (S = 1/40) .....	5
図6 杭列S X01平面・立面図 (S = 1/40) .....	6
図7 土師器実測図 (S = 1/3) .....	7
図8 陶磁器実測図 (S = 1/3) .....	8
図9 墨書陶磁器実測図 (S = 1/3) .....	9
図10 瓦実測図 (S = 1/3) .....	11
図11 石製品実測図 (S = 1/2) .....	12
図12 木製品、土製品、弥生時代の遺物実測図 (S = 1/2, 1/3) .....	13

## 表目次

表1 墨書土器一覧 .....	10
-----------------	----

## 図版目次

図版1 1 調査区全景 (南東から) 2 調査区近景 (西から) .....	15
3 東半部完掘状況 (南西から) 4 西半部完掘状況 (西から)	
5 調査区北壁東半土層断面 (南東から) 6 調査区北壁西半土層断面 (南東から)	
図版2 1 調査区西壁土層断面 2 調査区東壁土層断面 3 調査区東半礫群検出状況(西から)	
4 杭列S X 0 1 西半 5 杭列S X 0 1 東半 .....	16
図版3 出土遺物 1 .....	17
図版4 出土遺物 2 .....	18

# 第1章 はじめに

## 1 調査に至る経緯

2008（平成20）年1月15日、宗教法人東長寺（代表 藤田泰實氏）より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区御供所町2-4における五重塔建設に伴う埋蔵文化財の有無について照会があった（申請番号19-2-776）。申請地は博多遺跡群の範囲内にあることから、協議の上2008（平成20）年3月11日に試掘調査を行った。その結果現地表面下3mにて平安時代末期の遺物包含層を確認した。計画工事は設計変更不可能のことから、発掘調査を実施することになった。

本調査は2008（平成20）年6月9日に着手、6月23日に終了した。

## 2 調査体制（当時）

申請者 宗教法人東長寺 代表 藤田泰實

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課

調査総括 埋蔵文化財第1課長 山口譲治

同調査係長 米倉秀紀

調査庶務 文化財管理課管理係 古賀とも子

事前審査 埋蔵文化財第1課事前審査係 藏富士寛

調査担当 調査係 池崎譲二

埋蔵文化財第2課調査第2係 木下博文

整理作業 大塚俊二郎

東長寺のご協力により、現場事務所・外柵・表土鋤取りについて現物提供を受けた。記して感謝申し上げます。

# 第2章 遺跡および調査地点の位置と環境

博多遺跡群は博多湾に面し、那珂川と御笠川に挟まれた3列の砂丘上に展開する弥生～近世に至る複合遺跡である。3列の砂丘の内、現在の呉服町交差点付近を境に博多湾寄りを息浜（おきのはま）、内陸の2列を博多浜と呼称している。

今回の調査地点はその博多浜の中央、祇園町交差点の北側、メインストリート大博通りに面する東長寺の境内北西部に位置する。付近一帯は地下鉄空港線の敷設に始まり、その後民間開発等に伴う発掘調査が集中して行われている。実際東長寺は民間開発に伴う発掘調査の嚆矢となった場所である。その成果を次に簡単ながら概観する。

まず東長寺の西側門前、大博通り沿いで実施された地下鉄関係の調査では、井戸から出土した大量の中国産陶磁器の一括廃棄資料が平安時代末期の基準資料として評価が与えられたほか、14世紀前半に位置づけられる110体分に及ぶ火葬頭骨が発見され、鎌倉幕府滅亡時鎮西探題を襲撃し討ち取られた菊池一族の首級ではないかと大きな話題を呼ぶなど、その後の博多遺跡群における調査が注目される基盤を築く成果を挙げている。

それと並行し東長寺境内における納骨堂建設工事が知らされ、発掘調査に至ったのが1次、その後2年

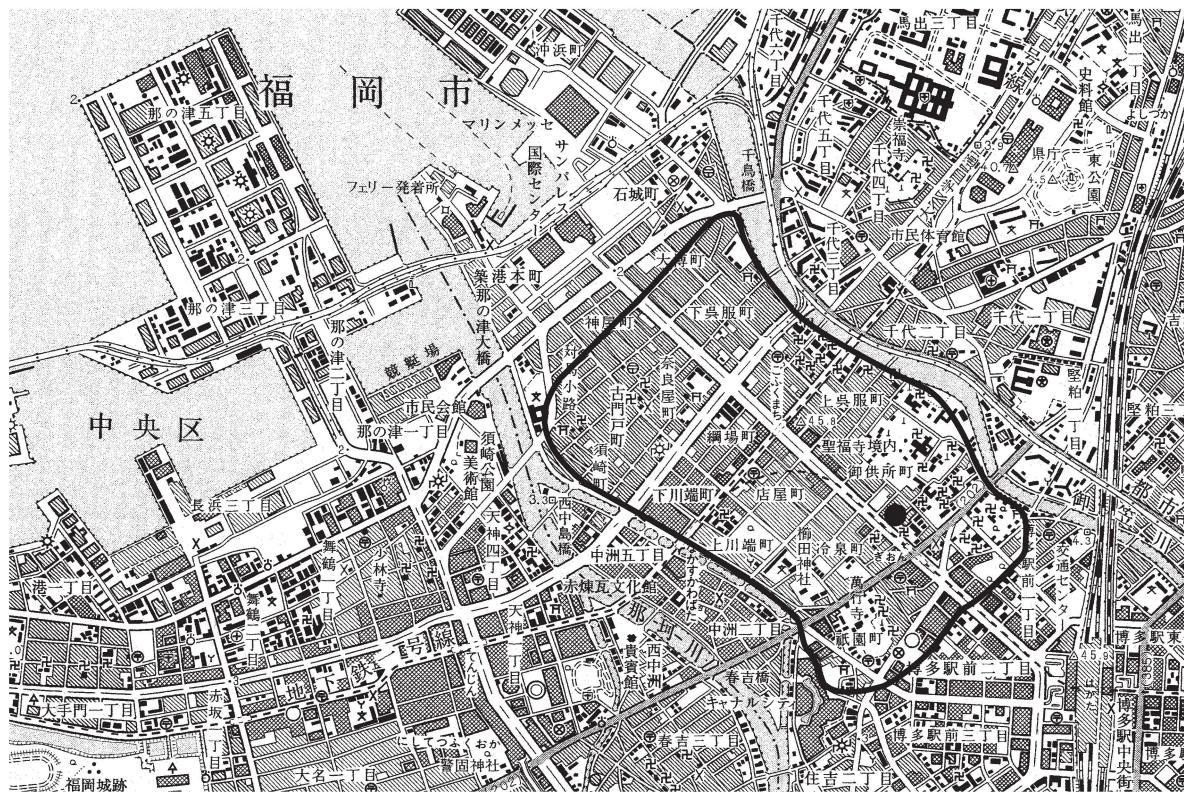


図1 遺跡の位置 ( $S = 1/25000$ )

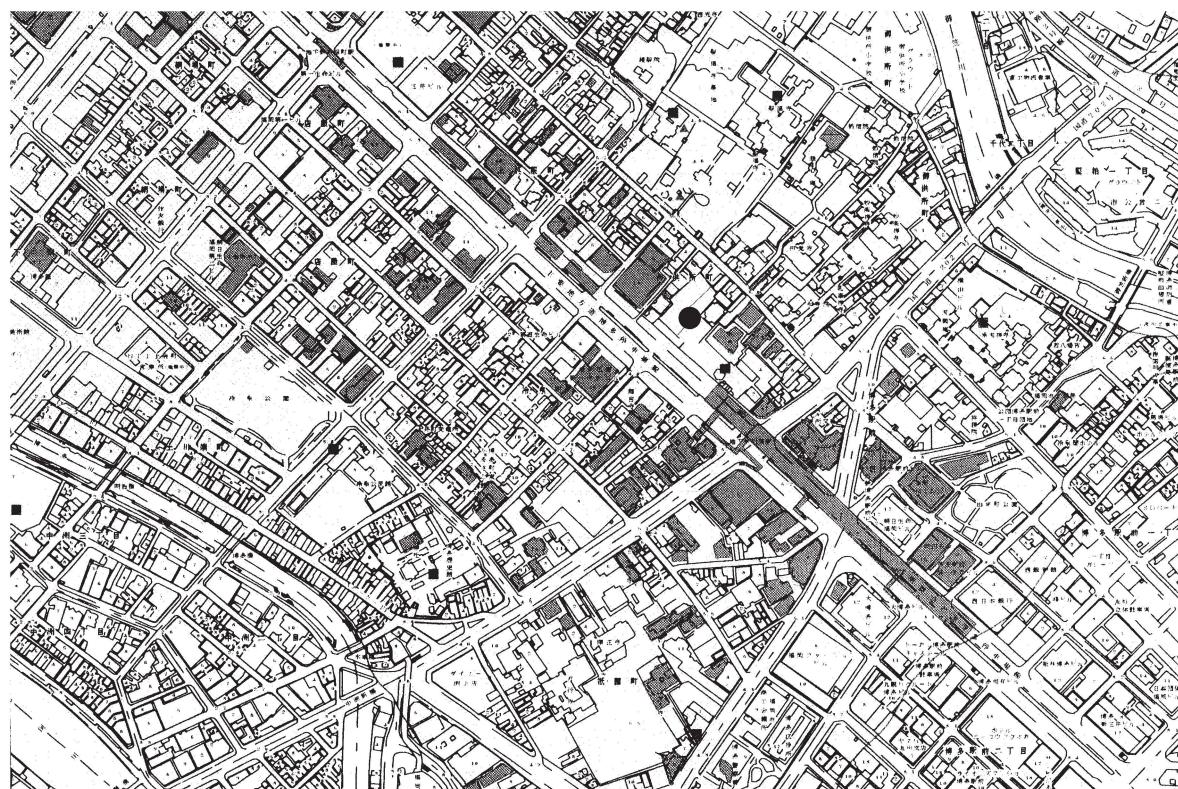


図2 調査地点の位置 ( $S = 1/8000$ )

後の本堂の新築工事に伴う調査が8次調査である。両調査では平安時代末期、12世紀代を中心に溝・土坑・井戸・木棺墓が検出され、遺物も墨書陶磁器や瓦・磚など本調査と関連の強い遺物が確認されている。

東長寺の道路を挟んだ北には名刹聖福寺がある。聖福寺の建立事情を記したとされる栄西の言上状には、建久年（119）、12世紀末という建立の時期、当該地域が建立以前は「宋人百堂」の地、つまり中国商人が信仰のよりどころとして墓堂を営んでおり、長らく無人であったという記述があることが知られている。これまでの調査成果から平安時代後期、現在の大博通りを境に西側の櫛田神社付近、冷泉町一帯に中国商人居住区、東側の御供所町一帯に中国人墓地を想定する大庭康時氏の研究がある。聖福寺北西隣の107次調査では中国産とみられる褐釉専用経筒を用いた経塚が検出されており、日本独自とされる経塚造営と中国人との接点がここにうかがわれる。

以上のように、平安時代末期～鎌倉時代初頭、中国との関わりのイメージが特に強い一方、さらに遡る遺構も確認されている。1・8次調査地点の南東隣、30次調査では弥生時代中期の竪穴住居を検出している。祇園町交差点付近では24次調査などで同時期の甕棺墓を検出しておらず、古くは弥生時代の集落・墓地が広がっていたと見られる。そうした時期の遺物が中世の遺物に混じって出土することがあり、8次調査では弥生時代中期の瓢形土器が最下層の砂層上に倒置した状態で出土しており、底部に打ち掻きによる穿孔があり、小児棺と見られている。

## 第3章 調査の記録

### 1 調査の概要

調査地点は東長寺境内の北西部、黒田家墓所、大師堂、本堂に囲まれた一画である。現地表面の標高は5.6mである。試掘調査では現地表面下3mで玉縁の白磁碗が出土しており、平安時代末期の遺物包含層あるいは遺構が確認されている。調査はその面まで事前に重機により表土鋤取りを行った上、2008年6月9日に着手した。深さが3mに及ぶものの調査期間・予算の関係から、協議により、矢板を打たず、犬走りを設け、2段の法面をつけることになった。したがって調査区の上場面積は153.4m<sup>2</sup>であるが、下場面積は29m<sup>2</sup>となり、さらに排土の場外搬出ができず、調査区内に置かざるを得なかつたため、実質的な調査面積は20m<sup>2</sup>余りと非常に圧縮されたものとなっている。

調査期間の制約により、より有効な調査方法を決定するため、まず博多遺跡群の基盤となる砂丘面までの深さと土層堆積状況の確認を目的として、調査区西壁に沿ってトレンチを掘削した。その結果、深さは1m程度、複数の遺構面が重なるのではなく、平安時代末期に属す多量の遺物が黒色の粘土層中に含まれていることが判明した（図5）。地山の砂丘面の標高は1.5m、その上に腐葉質の黒灰色粘土が堆積する（下層）。調査区南東側より灰褐色系砂層が堆積した後、その上に調査区北西寄りに大量の遺物を含む灰褐色系砂質土層が堆積する（中・上層）。その状況から谷部または汀線は確認していないが池状遺構があったものとみられる。

遺物は中国産陶磁器をはじめ国産陶器・土師器皿がみられ、中には墨書資料が36点含まれている。また中国系草花文軒丸瓦・押圧波状文軒平瓦をはじめとする丸・平瓦が伴っている。有機質の残りもよく、動物の骨のほか、木製品として箸・陽物形が出土している。石製品では滑石製の錘・碇形模造品に加え、表裏両面に女陰・雨乞いの文言を墨書した板石が出土した。遺物の総数は中コンテナ73箱に及び、実質調査面積からすると、1m<sup>2</sup>当たり3箱を越えており、その密度はきわめて高い上、種類・内容も傑出している。

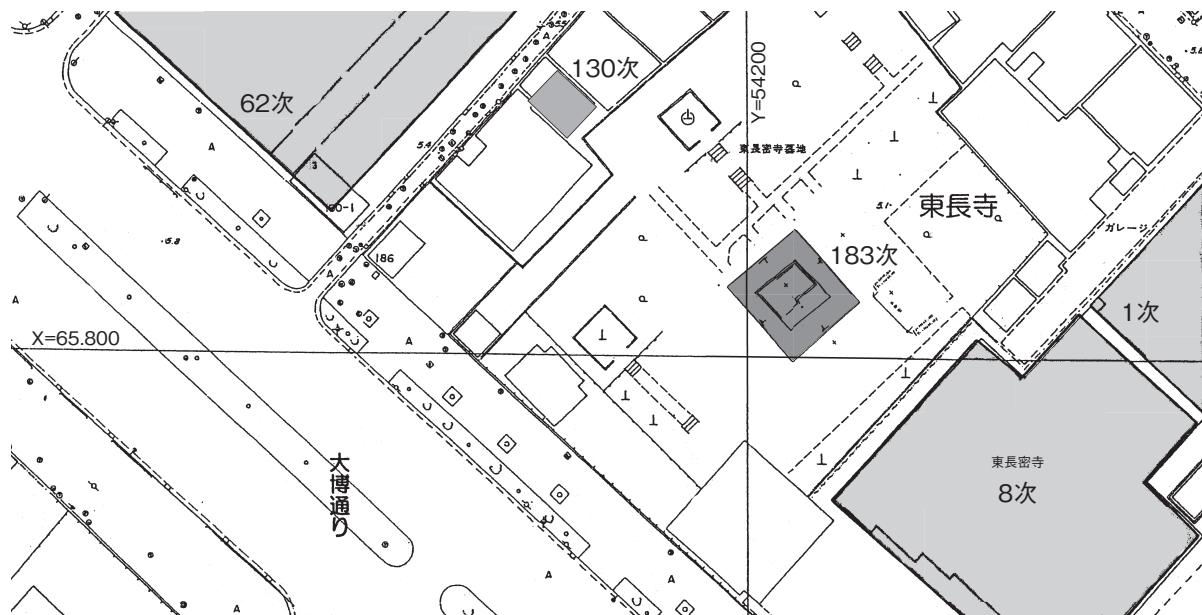
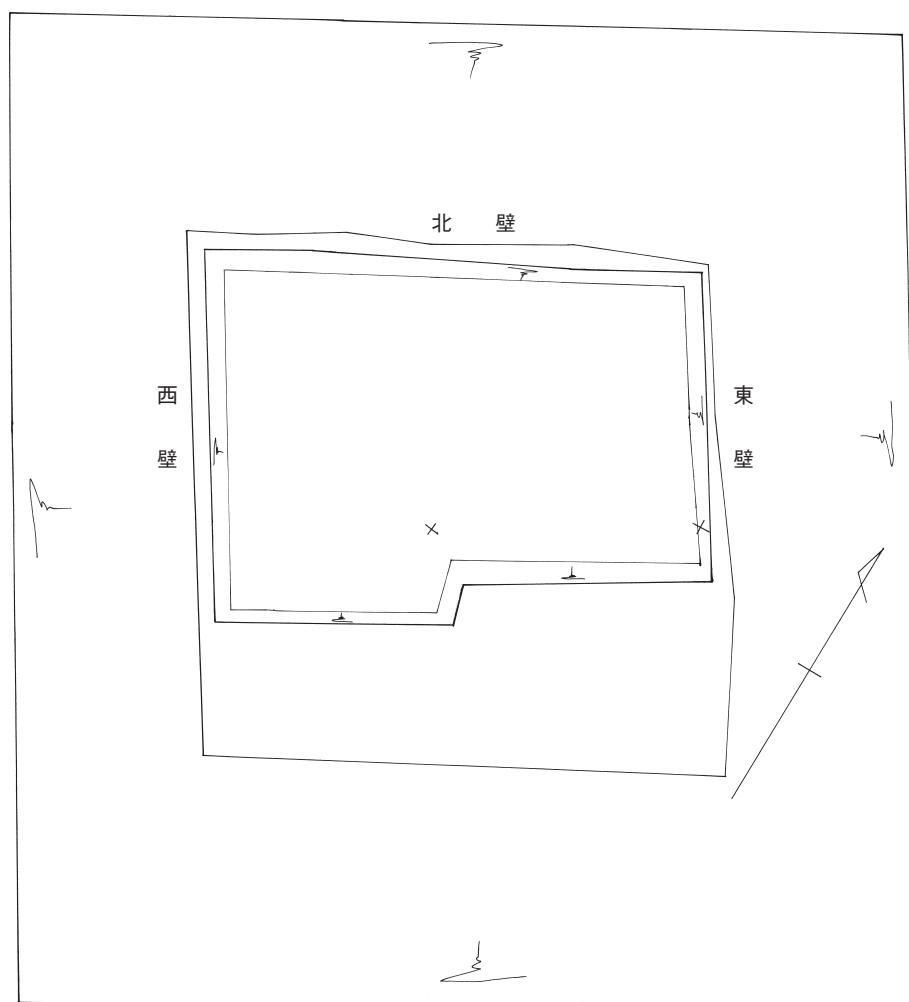


図3 調査区の位置 ( $S = 1/1000$ )



× は杭列実測基準点

図4 調査区平面図 ( $S = 1/100$ )

## 2 遺構と遺物

### 杭列

#### S X O 1 (図6)

調査区内のほぼ中央を東西方向に走って造られている。径5～8cmの丸太杭を深いもので75cm、15～45cm地山の砂丘面に打ち込み、25～35cm頭が出ている。強い規則性はうかがえないが、20cm間隔で打たれていたものか。丸太の他、一部に角杭、竹杭が見られる。

調査区遺物包含層土層断面図（図5）との関係を検討すると、地山の砂丘面上に堆積した腐葉質粘性土の上に、調査区南東側から砂層が盛ったように堆積した位置に杭列が設けられている。

調査区南東側から堆積している砂層は、腐葉質粘性土層と比較して、遺物の含有量がはるかに少なく、明らかに異質である。また砂層の傾斜面をなす箇所の上面に礫石が見られ、動物骨や墨書き板石、陽物形が出土している（図版3）。

調査面積が狭小であり、断定するには至らないが、以上の2点から砂層が池の汀を構築するような意図で人為的に盛られ、土留めの役割を果たすなど、砂層と強い関連を持って杭列が作られた可能性があるものと解釈したい。

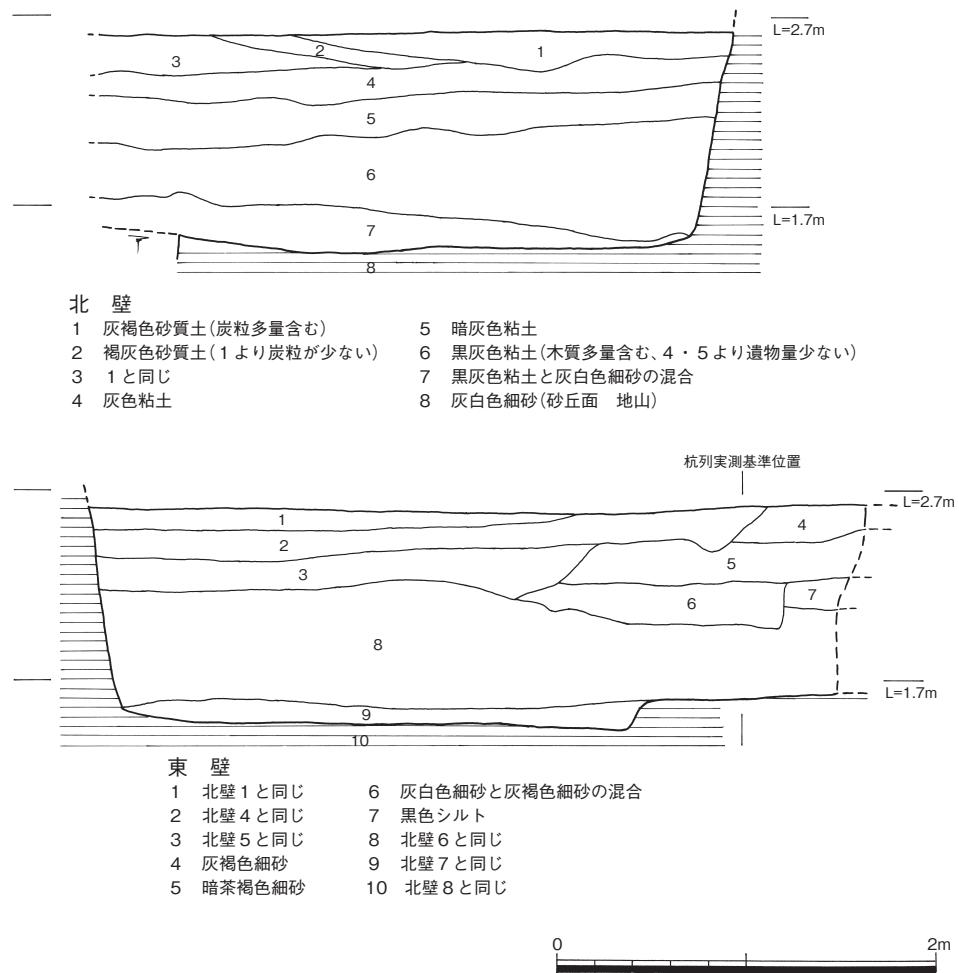


図5 調査区北壁・東壁土層断面図 (S = 1/40)

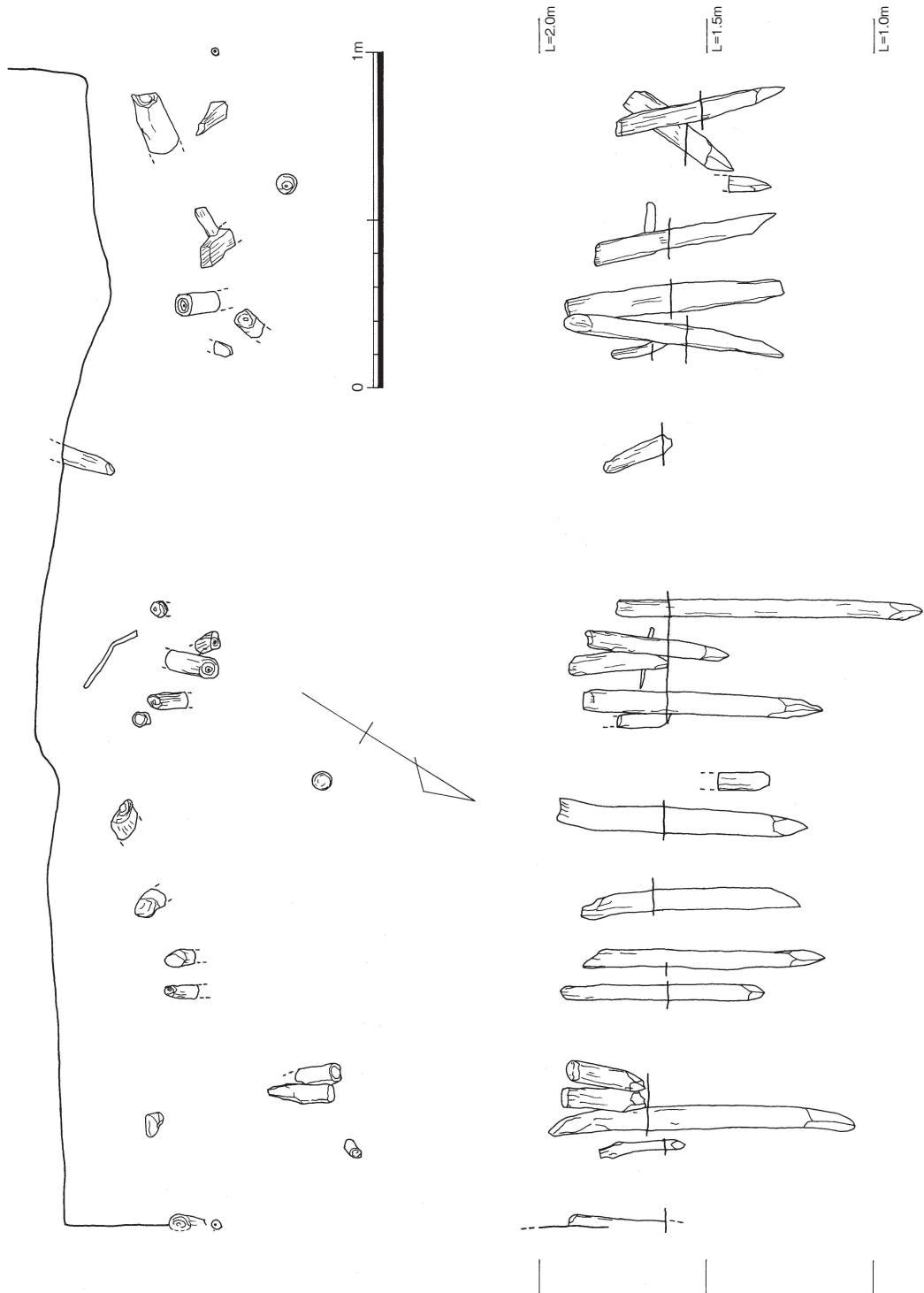


図6 杭矧SX01 平面・立面図 (S = 1/20)

包含層出土遺物（図7～12）

土師器（図7）

1～9は皿である。口径8.4～9.0cm、器高1.0～1.6cmである。底部の調整は1・4・6が回転糸切り・板目圧痕なし、9はなで、その他は回転糸切り・板目圧痕ありである。9の底部外面には長方形を象ったと見られる墨書きがある。色調は6が褐色、その他は浅黄橙色である。出土位置・層位は1・2が西半、3・4・6が東半中層、5が東半中層、7・8が東半下層である。

10・11は高台付皿である。10は口径9.2cm、器高3.3cm、高台径5.7cm、調整は内外面なでで、色調は橙色を呈す。11は高台径9.8cm、残存高3.1cm、調整は内外面なでで、色調は浅黄橙色を呈す。いずれも最上層出土である。

12～17は杯である。底部の調整はいずれも回転糸切り・板目圧痕ありである。口径14.6～16.0cm、器高2.7～3.2cmで、色調は14のみ灰褐色で、他は浅黄橙色である。14は二次焼成を受けたか、黒褐色に近くなっている。16は底部中央に1.2×1.0cmの菱形の焼成前穿孔がある。出土位置・層位は12・14が西半、15が東半上層、13が東半中層、16が東半、17が西半最下層である。

総合的にみると、下層から上層まで大きな型式差はなく、12世紀中葉から後半代の中に収まり、近い時期にほぼ一括的に遺物群が廃棄されたことがうかがえる。

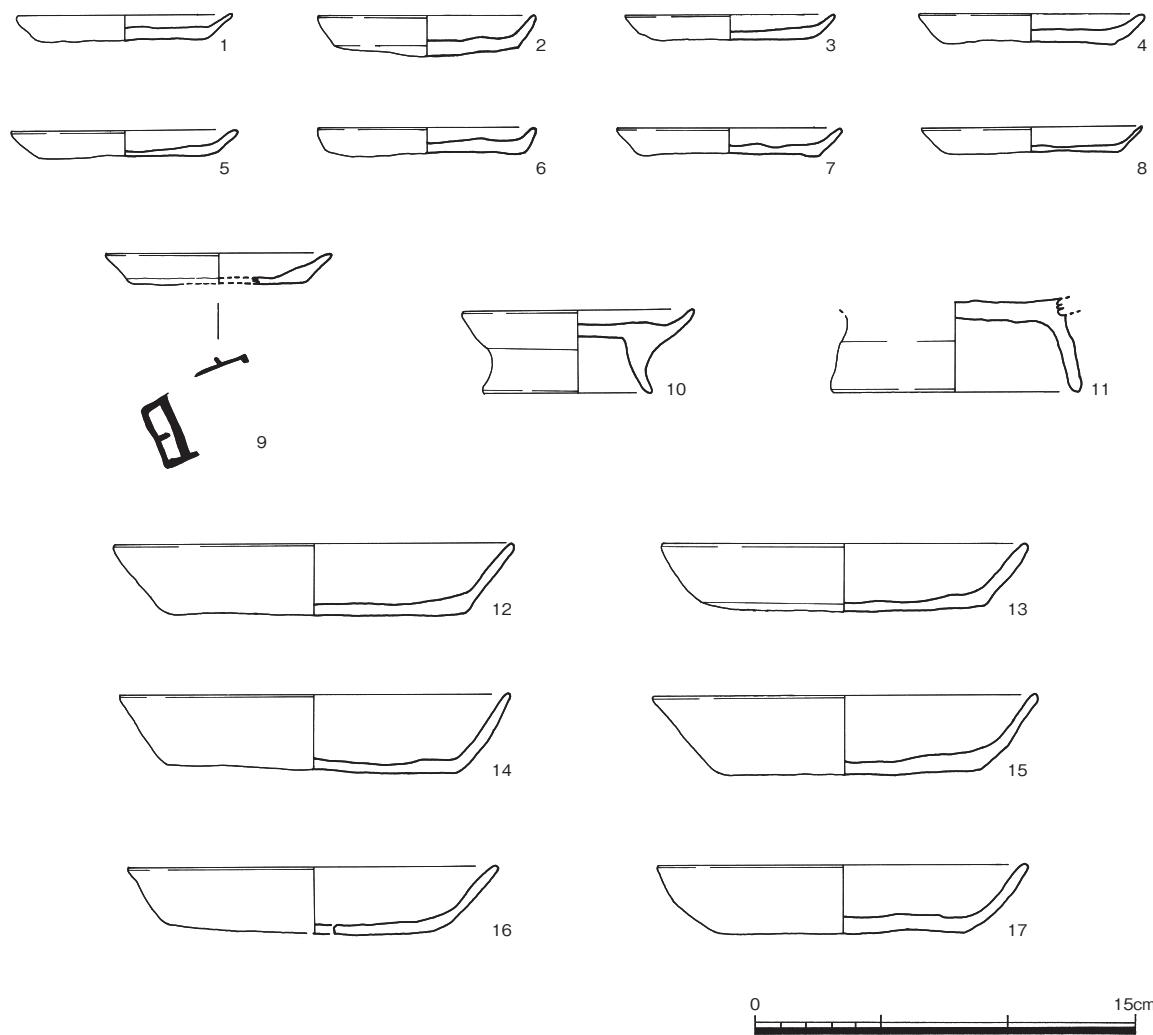


図7 土師器実測図（S = 1/3）

### 陶磁器（図8）

18・19・20は白磁碗で、18がIV-1a類、19がV-2a類、20はVII類である。20は口径11.2cm、器高5.4cm、高台径6.9cm。やや内湾気味に延びる体部で、施釉について外部は口縁部付近のみ、内面は全面の後、見込み部に輪状の釉掻き取りを施している。重ね焼きに伴うものと見られ、体部外面、口縁部付近に重ね焼きした別個体の一部が付着したままとなっている。18は東半中層、19は東半礫群下、20は西半出土。

21は白磁皿である。復元口径9.2cm、器高2.3cm、高台径4.2cm。口縁部と内面を施釉し、見込み部の釉掻き取りを施している。III-1類にあたる。東半上層出土。

22は龍泉窯系青磁碗I-1a類である。復元口径16.2cm、器高5.5cm、高台径6.2cmで高台の畳付を除く全面に施釉する。見込み部に0.6~1cm大の目痕が2ヶ所残存している。東半上層出土。青磁碗は他に龍泉窯系I-2a・2a'類、同安窯系I-1a・1b、III-2類、青磁皿は同安窯系I-1b類が出土している。

23は青白磁壺形合子の蓋、24は平形合子の身である。23は口径3.4cm、最大径5.4cm、器高1.0cmで、蓋表に菊花弁を浮き彫り風に表す。24は口径4.7cm、器高2.0cm、底部外面に焼成時の目痕が3ヶ所残存している。いずれも西半出土。他に平形合子の蓋が4点、身が4点出土している。

25は施釉陶器の鉢である。口径15.4cm、器高11.0cm、底径8.8cmで、底部を除く内外面に灰緑色の施釉を行い、体部に横方向の沈線3本を施す。東半中層出土。

26は瓦器碗である。口径16.4cm、器高5.7cm、高台径5.5cmで、体部内外面に細い暗文を施すが不明瞭である。西半出土。同一の破片がもう一個体出土している。また破片ではあるが楠葉型瓦器碗の口縁部を1点確認している。

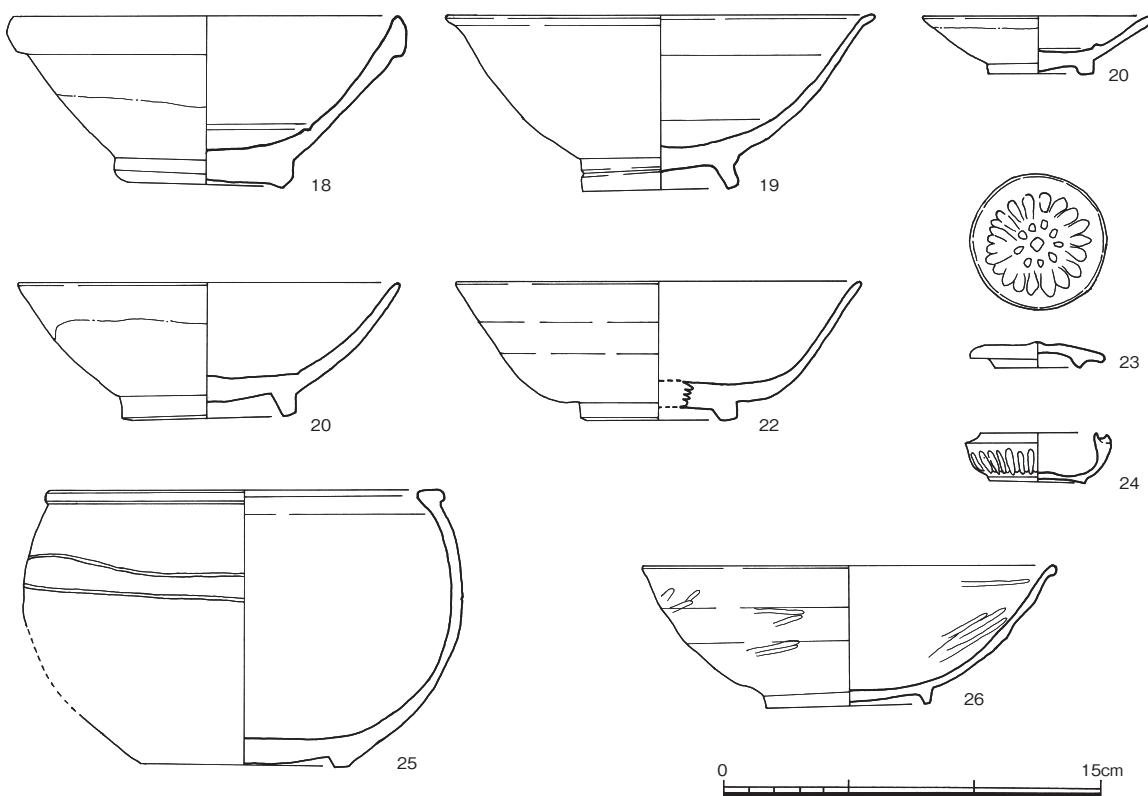


図8 陶磁器実測図 (S = 1/3)

### 墨書陶磁器（図9）

墨書陶磁器は計36点を確認した（表1）。

27・28は天目碗である。27は復元口径11.2 cm、器高4.9 cm、高台径4.0 cmで、体部内面および外部上半に黒褐色の釉がかかる。28は復元口径11.4 cm、器高4.3 cm、高台径3.8 cmで、体部内面に暗褐色、口縁部に灰色、体部外面上半に暗褐・暗緑色の釉がかかる。

29・32・33は白磁皿である。29は口径9.4 cm、器高3.2 cm、高台径4.4 cm、体部内面と外面上半に白色の釉がかかる。32は復元底径5.6 cm、残存高1.1 cm。33は復元底径3.6 cm、残存高1.4 cm。29は下層、32は東半、33は東半下層出土である。

30・31は施釉陶器の皿である。体部内面と外面上半に30は褐色、31は黄灰色の釉がかかる。30は西半、31は東半下層出土である。

34は青磁皿である。口径11.8 cm、器高3.1 cm、底径3.6 cm、底部外面のみ露胎で、それ以外は暗緑色の釉がかかる。見込み部に片切り彫りの花文をあしらう。西半出土。

35・36は白磁碗である。35は復元高台径6.0 cm、残存高2.0 cm、内面と高台外面まで釉がかかる。見込み部に櫛描文を施す。36は復元口径16.8 cm、器高7.1 cm、高台径7.1 cm、体部内面、外面上半に黄灰色の釉がかかる。内面に底部と体部の接合痕が沈線として残る。いずれも東半下層出土。

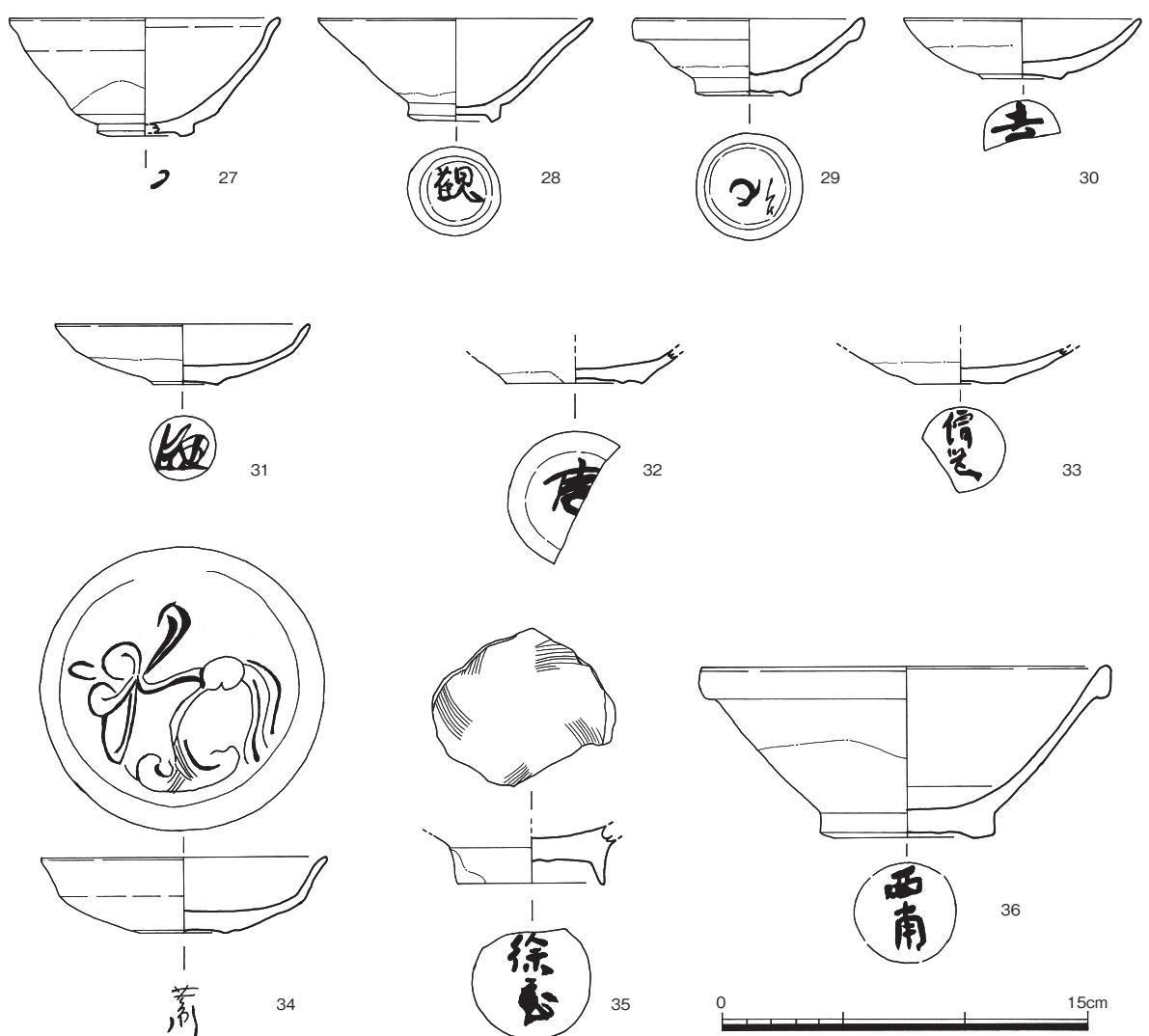


図9 墨書陶磁器実測図 (S = 1/3)

表1 墨書資料一覽

	墨書銘	器種・器形	記載部位	太宰府分類	出土区	層位	遺物番号
No.1	不明	天目椀					27
No.2	觀	天目椀	底部外面				28
No.3	少綱	白磁高台皿	底部外面	II - 1 b	東半	下層	29
No.4	寺	天目椀	底部外面				30
No.5	花押?	陶器皿	底部外面				31
No.6	唐	青磁皿	底部外面				32
No.7	僧(花押)	白磁皿	底部外面				33
No.8	薰	青磁皿	底部外面	I - 1 b	西半		34
No.9	徐(花押)	白磁椀	底部外面	V - 4 b	東半	下層	35
No.10	西南	白磁椀	底部外面	IV - 1 a	東半	下層	36
No.11	李(花押)	青磁皿	底部外面	IV - 1 b	東半	最下層	37
No.12	二	青磁椀	底部外面	I - 1 c	東半	最上層	38
No.13	李(花押)	白磁椀	底部外面				39
No.14	黃	白磁椀	底部外面	V - 4 b	西半		40
No.15	不明	白磁小椀	底部外面				41
No.16	不明	天目椀	底部外面				42
No.17	三十	白磁椀	底部外面				43
No.18	房	白磁椀	底部外面				44
No.19	房	白磁椀	底部外面				45
No.20	□堂	白磁椀	底部外面				46
No.21	経	白磁椀	底部外面				47
No.22	林文	白磁椀	底部外面	VI - 1 b	東半	中層	48
No.23	侑	青磁椀	底部外面				49
No.24	不明	白磁椀	底部外面	IV - 1 a	東半	中層	50
No.25	船□	白磁椀	底部外面	IV - 1 a	東半	中層	51
No.26	花押	白磁椀	底部外面	V - 4 b	東半	下層	52
No.27	満	陶器椀	体部下方外面				53
No.28	綱	白磁椀	底部外面				54
No.29	□寺	陶器椀	体部下方外面				55
No.30	吳	黃釉鉄繪盤	底部外面				
No.31	不明	白磁椀	底部外面				
No.32	不明	青磁椀	底部外面				
No.33	不明	黃釉鉄繪盤	底部外面				
No.34	不明	白磁皿	底部外面				
No.35	不明	白磁皿	底部外面				
No.36	不明	白磁椀	底部外面				

## 瓦（図10）

草花文軒丸瓦が21点、押圧波状文軒平瓦が16点、斜格子目叩き平瓦片が2点、鳴吻（しふん）の眼球が1点、尾が2点、通有の平・丸瓦が多数出土している。

56・57は草花文軒丸瓦である。56は瓦当部面径14.0 cm、残存長13.5 cm、色調は灰色、胎土は密で砂粒を含まない。調整は丸瓦部の内面のみ布目痕が残り、他はなでである。57は瓦当部面径14.6 cm、残存長8.6 cm、色調は灰色、胎土は密で砂粒を含まない。調整は丸瓦部の内面のみ布目痕が残り、他はなでである。

58は押圧波状文軒平瓦である。瓦当部は縦幅4.9 cm、横の残存幅10.6 cm、色調は灰色、胎土は密で砂粒を含まない。調整は内外面ともになでである。

通有の平・丸瓦については、赤褐色と灰色の2種があり、厚さ1.1 cmの薄手、調整は凸面が縄目たたきの上一部なで消し、凹面が布目痕を残す。

58は鳴吻の尾部、60は眼球である。58は残存縦幅12.1 cm、横幅13.2 cm、厚さ2.5 cmで、色調は灰色、胎土は密で砂粒は含まない。調整は側面がヘラ削り、裏面がなでで藁を敷いていたような痕跡が全面に残存している。類例は築港線2次調査540号土坑出土のものがあり、遺構の時期は11世紀後半～12世紀前半と見られている。

61は磚である。縦27 cm、横16.5 cm以上、厚さ3.5 cmである。

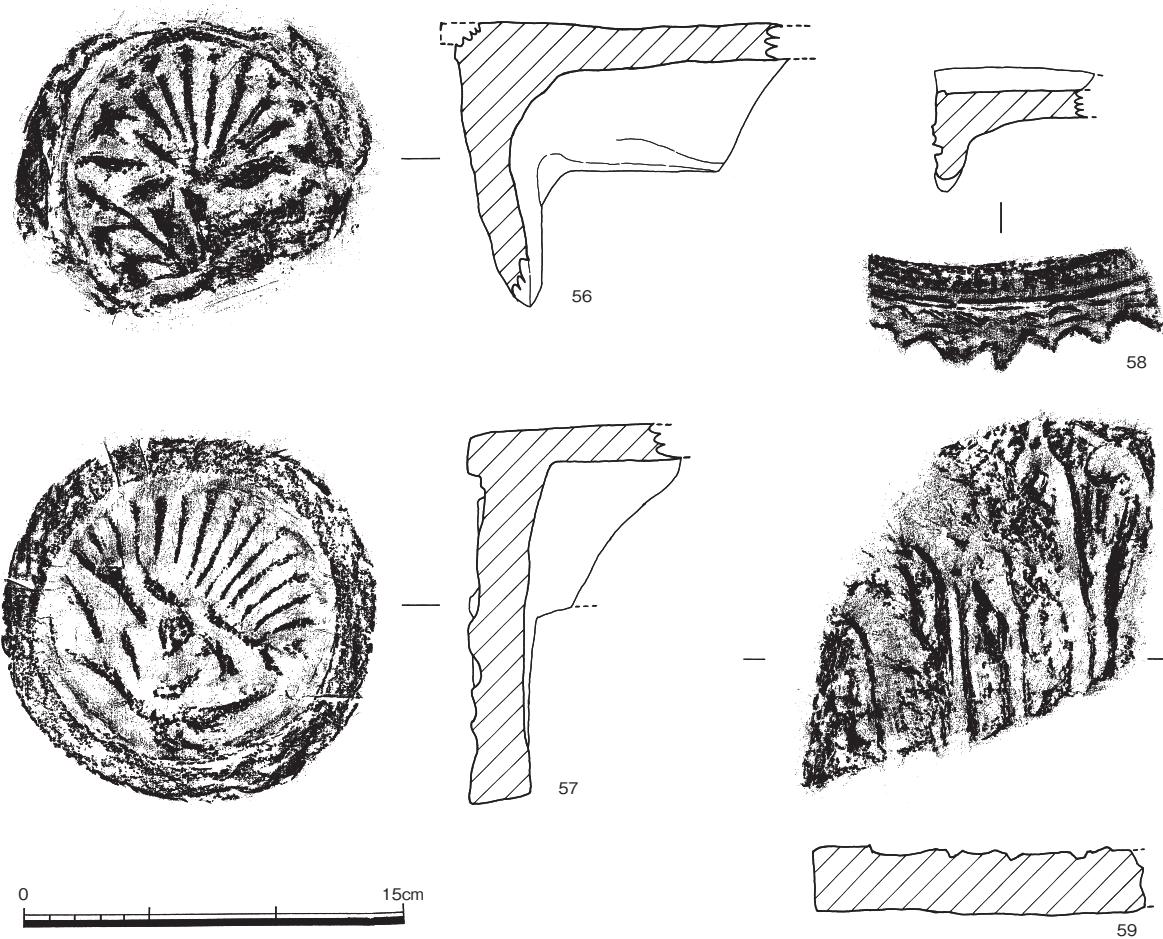


図10 瓦実測図 (S = 1/3)

### 石製品（図11）

62・63は滑石製碇形模造品である。62は長さ6.3cm、幅1.6cm、厚さ1.5cm、重さ27.0g、63は長さ5.3cm、幅1.6cm、厚さ1.2cm、重さ19.5gである。類例は博多遺跡群では22次、39次、165次、172次出土例がある。64は砥石である。長さ5.2cm、幅1.4cm、厚さ1.2cm、重さ14.5gである。65は滑石製風鐸形分銅である。長さ5.7cm、最大幅4.4cm、厚さ2.5cm、重さ118gである。

66は板石で、縦長15.3cm、横幅12.7cm、厚さ3.1cmである。表面に十字形枠囲いと文章、裏面に女性器と思われる図形を墨書きしている。文章には「雨」字が含まれること、木製品の陽物形と合わせ女性器を象る遺物が雨乞いに用いられた例が知られることから、降雨の祈祷に関わる遺物とみられる。また「僧」という文字が含まれ、祭祀に仏教が関わっていたことがうかがえる。

67は滑石製の容器蓋か。径9.2cm、高さ5.6cmである。68は毬杖の玉である。径2.9cmで、上下両端は平滑にされている。計3点確認している。他に滑石製鍔付鍋が出土している。

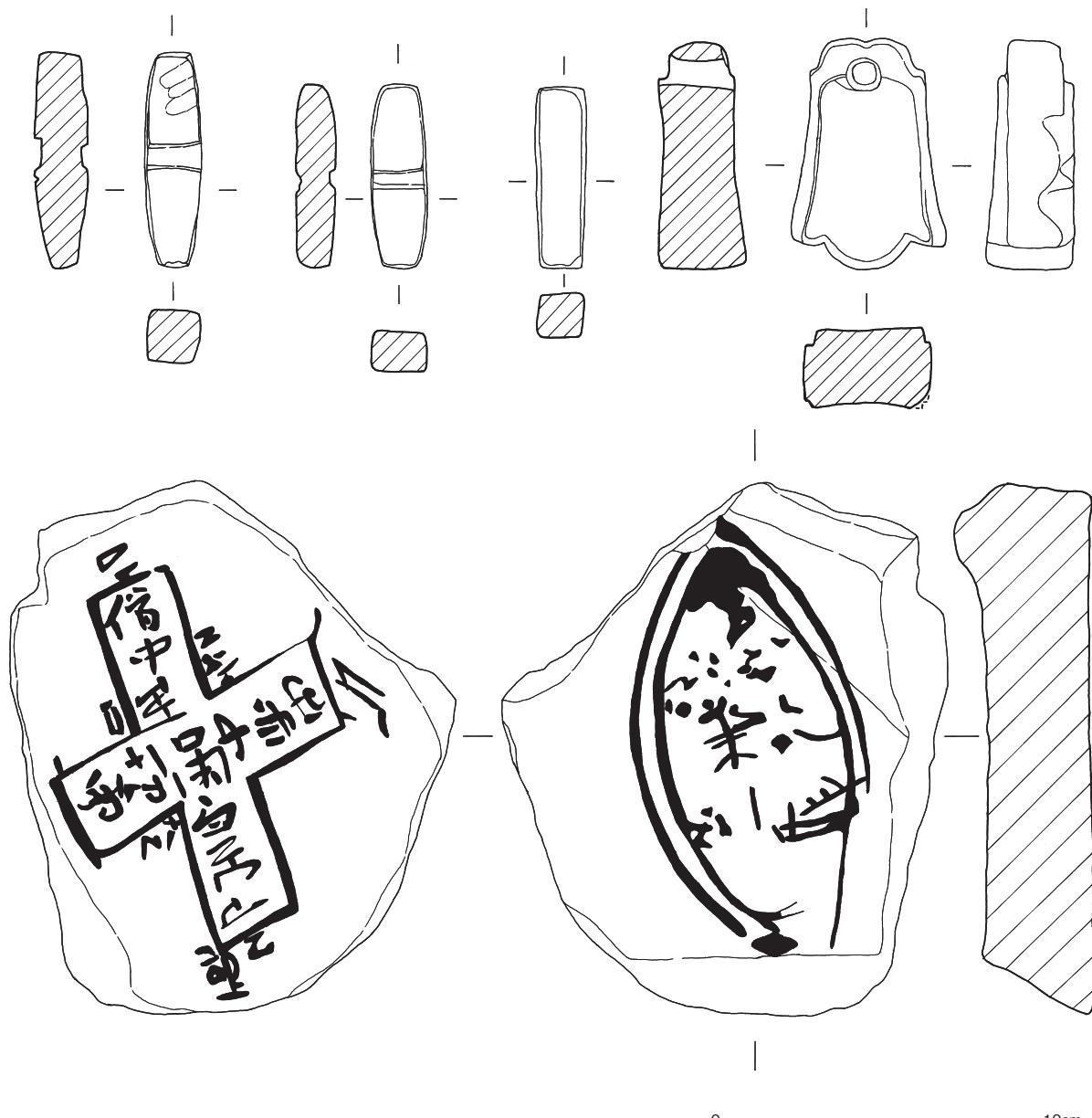


図11 石製品実測図 (S = 1/2)

### 木製品（図12）

69は箸である。長さ23.7cm、幅0.7cm、先端を細く削り出し、角の面取りを行っている。

70は長さ61.5cm、太さ3.0cmのやや湾曲した樹皮つきの枝で、先端より3.5cm部分に割り込みを入れている。陽物形か。71は長方形板で、残存長16.6cm、幅5.7cm、厚さ0.8cmである。2ヶ所に橢円形の穴があけられている。片方の端に焦げ痕があり、焼損したものと見られる。

### 土製品（図12）

72は土師質鍋の模造品である。復元口径6.8cm、器高3.9cmで、調整は底部外面に回転糸切り痕が残り、それ以外はなでである。断面三角形の粘土を貼り付け、鍋の鍔部を表している。

### 弥生時代の遺物（図12）

第2章で述べたように、本調査地点付近の祇園町交差点一帯では弥生時代の遺構が確認されており、本調査でもそれらと関連する遺物が、流れ込みと見られるものの確認されている。

73は筒形器台である。器高15.3cm、口径9.0cm、色調は浅黄澄、胎土は0.5～1mm大の白色・灰色砂粒を多量に含む。調整は内面がなで、外面は縦方向のヘラミガキを施した後ナデ消したものか、ヘラミガキの痕跡が極めて不明瞭である。74は甕の底部である。底径5.8cm、残存高3.3cm、色調は灰褐色、胎土は密、外面に刷毛目を施す。いずれも弥生時代中期に属する。

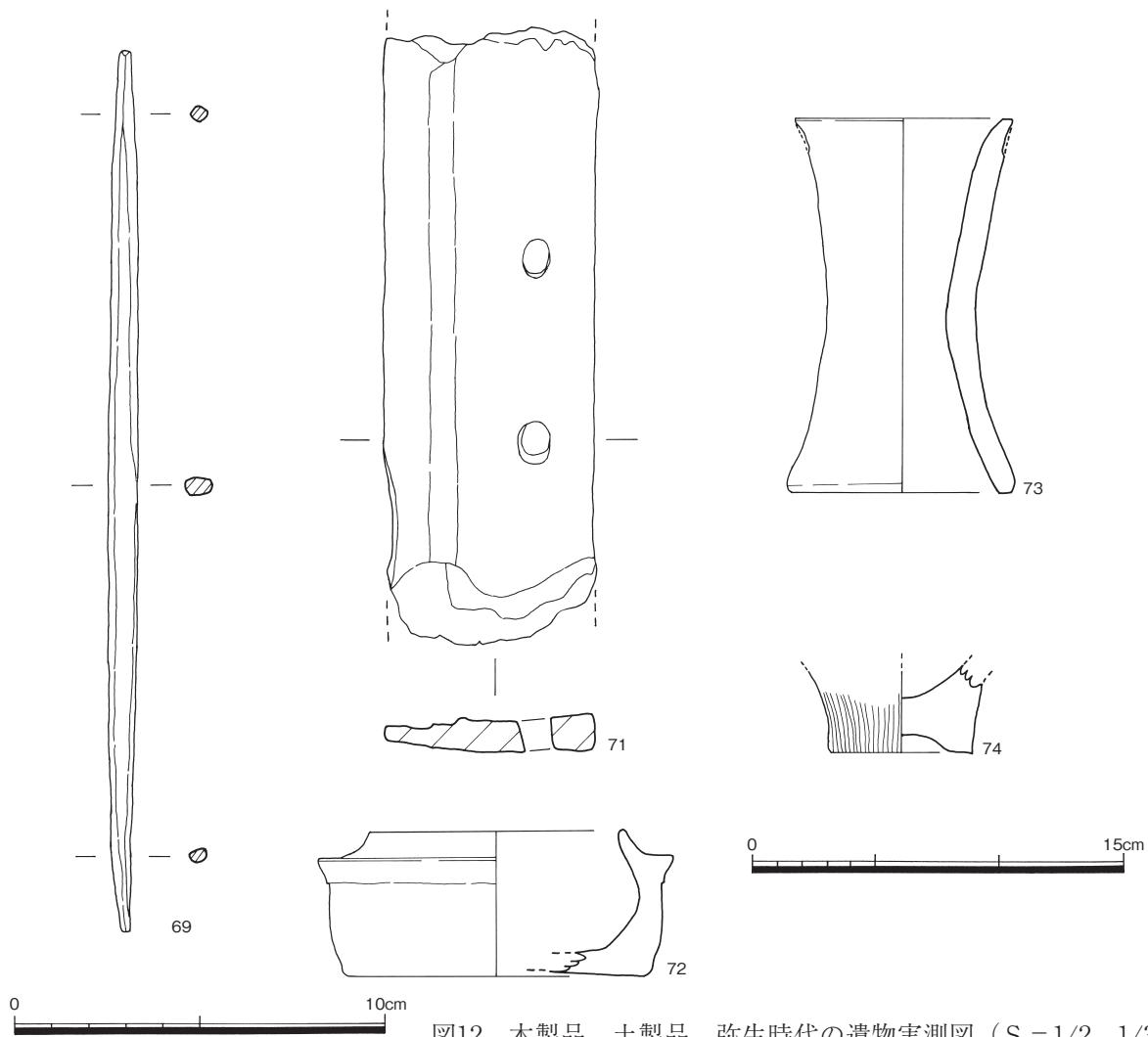


図12 木製品、土製品、弥生時代の遺物実測図（S = 1/2、1/3）

## 第4章 まとめ

以上の調査成果について、最後に簡単ながらまとめておきたい。

出土遺物群を総体としてみると、青磁は龍泉窯系鎬蓮弁文椀を1点も含まず、土師器皿も回転糸切り・板状圧痕ありを主体とすることから、平安時代末期・12世紀末を下限とする時期におさまる。腐葉質の粘性土が堆積していることから、付近は池状遺構あるいは谷部のような滞水状況にあったものと考えられる。その堆積土の中に多量の輸入陶磁器および国産陶器、瓦が大量に含まれていた。1m<sup>2</sup>あたりの出土量は中コンテナ3箱強であり、密度は異常に高い。残存率が高く、完形品も多いことから、一括に大量放棄されたものと考えられる。

瓦は赤瓦・青瓦の両方があり、厚みが薄いのが特徴である。軒瓦は中国系草花文軒丸瓦、押圧波状文軒平瓦である。軒上の両端に飾られた鳴吻の一部、建物床面に敷き詰めた瓦磚も確認されている。

輸入陶磁器には墨書を持つものがあり、中国人名と見られるもののほか「僧□」もあり、寺院に関するものも含まれている。

こうした遺物から想像すると、中国風の仏堂が近辺に建てられていたものか。建物の性格・屋根、またそれらに影響される町の景観を復元するにあたり、貴重な資料群となるものと考えられる。

調査地点の東側に位置する聖福寺の創建が建久6年（1195）ともいわれており、それ以前の付近一帯は「宋人百堂」といわれるほど、中国人による墓堂が建ち並んだ地とされている。今回の出土遺物群がそれらに関連する可能性は高い。

以上のように交易に訪れた中国商人達の心のよりどころとされる地域において、それらに関わる遺物が多量に発見されるという状況の中で、さらには付け加えて興味深い現象が確認できた。それは雨乞い祭祀に使用されたと見られる木製陽物形と墨書板石の出土である。

仏教・禪宗が純粹に外来のものであるのに対し、性器に対する信仰や雨乞いは日本古来存在するものである。中国人がそうした信仰を受容し、関わったのかは判然としない。しかし全く異質のものがなぜ同地点において確認されたのか、大いに注目できる。

聖福寺近傍の107次調査地点では中国産と見られる専用経筒を用いた経塚が発見されている。経塚は仏教を中心思想とするものの、その造営は日本独自のものと考えられており、中国人がそれを受容したという見方もできる。こうした事例を参考にすると、中国風の仏堂と日本古来の性器信仰・雨乞いという、単に物というハード面にとどまらない、信仰というソフト面における異質文化の融合・交流を視野に入れておく必要が生じてくる。

今回出土した遺物群から派生する問題は多岐にわたるが、種々の制約もあり十分に論じられなかつた。ご寛恕を乞うばかりである。少しでも多くの方に存在・価値を知り、正しく評価をし、活用していただけるのを、お願いしたい。

# 図版 1



調査区全景（南東から）



調査区近景（西から）



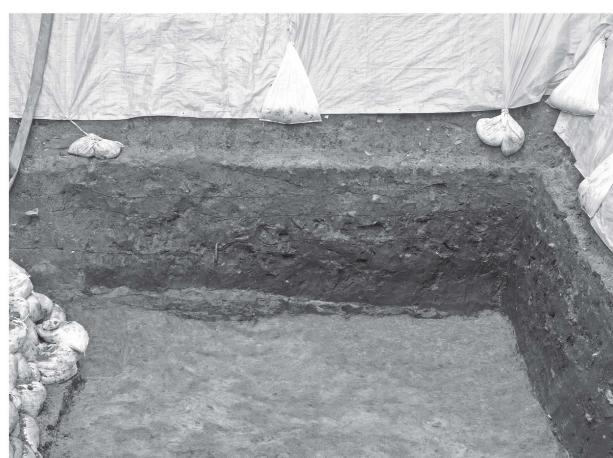
調査区西半完掘状況（南西から）



調査区東半完掘状況（西から）

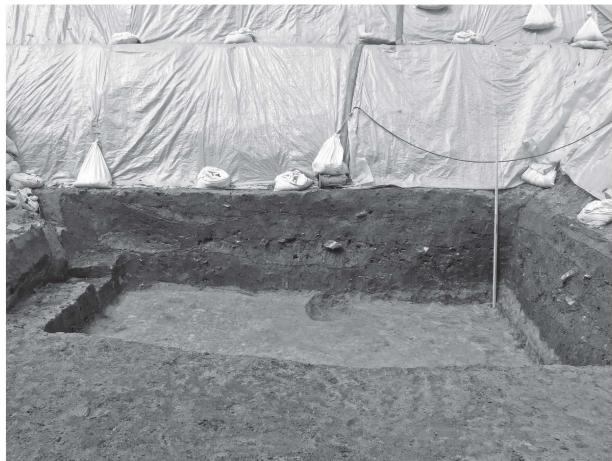


調査区北壁西半土層断面（南東から）



調査区北壁東半土層断面（南東から）

## 図版2



調査区西壁土層断面（北東から）



調査区東壁土層断面（南西から）



調査区東半礫群検出状況（西から）

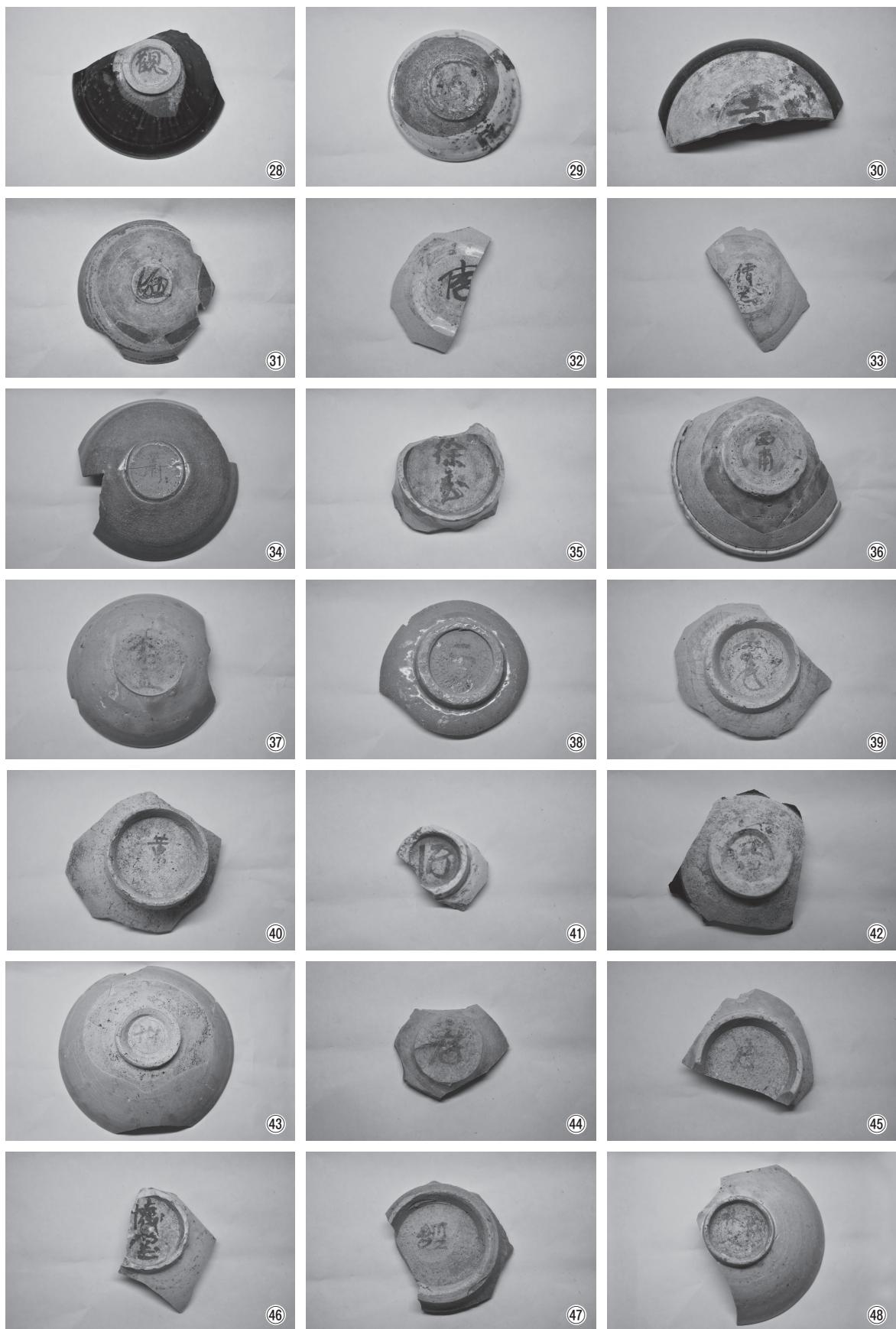


調査区西半杭列（北東から）



調査区東半杭列S X 0 1（西から）

### 図版3



出土遺物 1

## 図版4



出土遺物2

## 報告書抄録

書名ふりがな	はかたひやくさんじゅうなな						
書名	博多137						
副書名	博多遺跡群第183次調査報告						
卷次	137						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1088集						
編著者名	木下博文						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092(711)4667						
発行年月日	2010年3月23日						
所 在 地 名 ふりがな	所 在 地 名 ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	
		市町村	遺跡番号			2008. 6. 9 6. 23	153.4 m <sup>2</sup>
はかたいせきぐん 博多遺跡群	ふくおかはかたくごくしまち 福岡市博多区御供所町 2-4	40131	0121	33°35'39"	130°24'49"		
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
五重塔建設	集落	平安後期	柵列	土師器、中国産陶磁器、瓦、 石製品、木製品、動物骨			

## 博多 137

博多遺跡群第183次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1088集

2010年（平成22年）3月23日

発行 福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社 博多印刷

〒812-0028 福岡市博多区須崎町8-5